「誕生から１００年“赤山健児の歌”の歴史的背景と歌の意味」

解説　　松原　秀雄（１期・ｓ２５年卒）

赤山健児の歌は、松江中学校校長西村房太郎によって、大正７年に作られた。作曲は岩佐万次郎である。歌詞は、言葉使いが古く、また、日本史の一部をなす郷土の歴史や、当時の日本がおかれていた世界の歴史を知らないと、理解できない文言がある。このため、言葉の意味と歴史的背景について考えてみた。

一、朝暾直刺す双松の　　天籟胸に光あり
浪に砕くる三日月の　　影に古雄の真をみる
天地の精を身にしめて　　正気を舒ぶる壱百年

二、瘴煙罩むる椰子の下　　月に嘯く夕あり
氷雪鎖す丘の上　　北斗に吟ずる晨あり
万里の風に浪搏ちて　　大鵬の翼揮へよや

三、嗚呼剛健と質実と　　心の楯に執り持てば
悪魔の征矢も身にたたず　　高く攀ぐる我旗の
霊光迷路の闇を射て　　理想の郷を照らすなり

旧四、渤海湾に浪立ちて　　四億の民は楫を絶え
興安嶺に雲湧きて　　東亜の危機は迫り来ぬ
重き使命を背に負ひて　　起てや赤山健男児

新四、稜威輝く日の本の　　国の礎さし固め
東洋平和を保つべき　　使命を負へる我等なり
責務は重く身は軽し　　起てや赤山健男児

歌詞が作られたのは大正７年で、これは、大正３年～大正７年の第１次世界大戦（1914～1918）中のことであった。第１次大戦が終わり、旧四番の歌詞は時代にそぐわなくなったとして、西村校長の次に校長に就任した田中一元校長によ

って、書き換えられたのが新四番の歌詞である。これが今日まで歌い継がれている四番歌詞である。一番の歌詞から順にみてゆくことにする。

【一番】

朝暾直刺す双松の　　天籟胸に光あり

「朝暾直刺す」は朝日がさすである。「双松の天籟」において、「籟」は風の音、「天籟」は天空を吹く風の音であるが、そのほかに優れた出来栄えの詩歌の意味があり、松江中学の生徒に配布されていた小型の唱歌集の名称となっていた。校歌、応援歌、軍歌、当時の少年たちに適した愛唱歌が含まれていた。また「双松の天籟」には二本松に吹き抜ける松籟（松風）の意味もある。「天籟胸に光あり」は、天籟歌集をポケットに持ち歩き、時にこれを開いて歌を歌うように心がけることによって、自分の将来や日本の将来に関して、希望の光と、勇気が沸き起こるのを感じることができるという意味である。

浪に砕くる三日月の　　影に古雄の真をみる

「古雄」は郷土の英雄山中鹿之介幸盛であり、戦国時代に尼子方に属した武将である。安来市広瀬町の月山にある月山富田城を本拠とする戦国大名尼子氏は、毛利元就軍に敗れ、富田城も落とされた。山中鹿之介は、尼子家の遺児尼子勝久を立て、尼子遺臣を糾合して、1568 年から 1578 年の 10 年間に３回にわたって主家再興のために挙兵し戦った。24 歳から 34 歳の間である。真山に城を持っていた。真山は松江高校北方約３ｋｍに位置する標高 256ｍの山である。鹿之介は最終的には毛利軍に降伏し、勝久は切腹、鹿之介は備中松山城に在陣する毛利輝元の下へ連行される途中で、毛利氏の刺客によって謀殺された。鹿之介は、三日月の前立ての兜を着用していた。尼子家再興のために、三日月に「我に七難八苦を与えたまえ」と祈り、いかなる苦難にも打ち勝つぞと覚悟を固めたことは有名である。湖に映った三日月の映像が波に砕けるのを見ると、鹿之介の雄姿や偉業が彷彿と蘇り、その精神を感じることができるという意味である。

天地の精を身にしめて　　正気を舒ぶる壱百年

「精」は心身の力、元気、精力。「舒ぶる」は伸ばす、延ばす、広げる。我校は、生徒が、天地から授かった元気を体に沁みこませて、天地に誓って恥じない正し

い公明正大な気風を伸ばすよう努めてきた 100 年であった。

【二番】

瘴煙(しょうえん)罩(こ)むる椰子の下　　月に嘯(うそぶ)く夕(ゆうべ)あり

この歌が作られた大正７年は、サラエボ事件に端を発した第１次世界大戦（大正３年～大正７年）中である。日本は、日英同盟に基づくイギリスからの参戦要請に応じて、英・仏・米・露の連合国の側に立って、独・墺と敵対した。当時ドイツはアジアに植民地を持っていた。それは、太平洋の南洋諸島と、中国からの租借地の山東半島の青島（チンタオ）である。日本は開戦の１か月後に、ドイツ帝国の植民地の南洋諸島の島々を、ドイツ東洋艦隊を追い払って占領した。この時代は、日本による南洋諸島開発移民の展望が開きはじめた時代である。大正時代は日本の人口増加、食糧不足、農村不況のため、すでに、南米、ハワイなどへの移民は実施されていた。大戦後、赤道以北の南洋諸島（マリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島）は、国際連盟によって、日本の委任統治領（実質は植民地）とされた。

「瘴」熱帯地方の風土病、熱病。「瘴煙」は熱病の毒気を含む湿気や靄。「罩むる」は込める、詰め込む、立ち込める。「嘯く」は詩歌を口ずさむという意味。南方の国、南洋諸島などの熱帯地方へ行くことがあれば、熱病の毒気を含む湿気や靄の立ち込める熱帯雨林（ジャングル）の椰子の下で、月に照らされながら詩歌を口ずさむことがあるであろう、という意味である。

氷雪鎖(とざ)す丘の上　　北斗に吟ずる晨(あした)あり

第１次大戦中、健児の歌が作成された年の前年（大正６年）にロシア二月革命が起った。「革命軍に囚われシベリアへ送られたチェコ軍団を救出する」という大義名分で、日本は、英・米・仏などと共にシベリアに出兵した。日本は兵力 73000 人を投入した。これはロシア革命に対する干渉戦争である。

「氷雪鎖す」は氷や雪によって、行く手や帰路が鎖されていること。「北斗」は北斗七星、「吟ずる」は詩歌を歌う、「晨（あした）」は朝あるいは夜明けの意味。本校を卒業して、北方の国に行くことがあれば、氷雪に行く手や帰路が閉ざされた夜明けの丘の上で北斗七星に向って歌を歌うことがあるであろう、という意味である。

万里の風に浪搏(う)ちて　　大鵬の翼揮(ふる)へよや

第１次大戦の開戦２か月後には、ドイツの租借地となっていた山東半島の青島のドイツ軍港と、膠州湾のドイツ軍の要塞を攻略した。欧州戦線では飛行機が戦争に用いられ始めていた。これは、ライト兄弟の有人初飛行の 10 年後のことである。日本では、海軍が飛行機４機で青島市街や要塞に爆撃を行った。この時使われた飛行機はモーリスファルマン型複葉水上飛行機で、胴体は骨組み構造むき出し、翼は羽布張りであった。飛行機は、飛行機母艦に搭載して戦場の前に広がる黄海へ行き、海面に降ろした後、自力発進させるものであり、爆弾は胴体の骨組みに紐で括り付け、爆撃の時にナイフで切り落とすというものであった。

「万里の風」とは中国大陸を吹き抜けてくる風、「鵬」「大鵬」は大きい鳥、「浪博つ」は波を打つと同じ、「揮う」は振るうと同じで、鳥の羽根の動きと同じく一端を中心として動かすこと。この歌詞は、青島へ向かって飛び立とうとする飛行機を大鳥に見立て、大陸を吹き抜けてくる風に向かって、黄海に生じる波をフロートで打ちながら水上を滑走し、大鳥が羽ばたくように海面から勇ましく飛び上がり、大空を飛翔せよと激励する意味のものである。

【三番】

嗚呼剛健と質実と　　心の楯(たて)に執り持てば　　悪魔(サタン)の征矢(そや)も身に立たず

質実剛健の気風を心に刻みつけておけば、悪魔の誘いを撥ね退けることができる。これは個人の心構えを説いたもののように述べてあるが、しかし後半に続くと、高く搴げる我旗とは誰の旗かということになる。普通は、単なる個人が自分の旗を高く搴げることは無い。旗を搴げるのは国家である。我旗とは、我国の旗（主張・方針）のことである。

高く搴(かか)ぐる我旗の霊光　　迷路(メーズ)の闇を射て　　理想の郷(さと)を照らすなり

この時代は、帝国主義の時代であり、欧州の帝国主義列強、英・仏・蘭・西等による、アジアの植民地分割はすでに終わっていた。中国の海に面した港や地域は、欧州諸国の租借地や権益となっていた。中国東北部（満州）の鉄道や鉱業はロシアの権益となっていた。遅れて国際政治の場に出てきたのは、フロンティアが太平洋岸に達し、南北戦争を終えた米国と、日本だった。米国は、日本の反対にも

かかわらず、ハワイを強引に領有した。また、フィリピンを米西戦争でスペインから奪っていた。次は中国だとして、中国に対して、門戸開放、機会均等を求める圧力を掛けていた。日露戦争の結果、米国仲介のポーツマス条約によって、日本はロシアから満州権益を譲られた。南満州鉄道、炭鉱採掘権などである。しかし仲介した米国は、ロシアの賠償金支払い無しという日本に不利な取り決めに誘導した。日本の民衆は不満を爆発させ、日比谷焼打ち事件などが起こった。米国は、日露戦争直後から引き続いて、満州に割り込みを図るため、日本の満州権益を覆そうとして、妨害を行うと共に、甘い提案もしてきた。日本政府が日露戦争の軍費のために行った外国借款の返済に苦労することを見越してその買収を申し込んだ。また費用の掛かる南満州鉄道を合弁事業とすることを申し込んだ。これらは米国の満州利権獲得のためのステップだった。日本政府が拒否したためこれらは実現しなかった。また米国資本による満鉄平行線の建設も提案したが、列強の反対で実現しなかった。満州権益を米国にさらわれたら日露戦争の戦死者84000 人の霊は浮かばれない。この地に満蒙独立・五族協和の理想郷を建設しようとして、既に少なからぬ日本人がこれに関わっていた。この理想郷建設は将来実現すべき目標と考えられていた。当時日本の主張を妨害するのは、英語をしゃべる悪魔（Satan）と思われていたであろう。この歌の成立の１３年後に起る満州事変と、それに続く満州国の建国は予感されていた。

「搴ぐる」は掲げると同じ。「我旗」は日本が理想としていることの内容、主張、方針。日本の主張方針を旗幟鮮明（きしせんめい）にして、世界に知らせておけば、その霊力をもった我が国の政策が、迷路・迷宮（maze）のように複雑怪奇な世界情勢を正して、理想郷の存在を明らかにするであろう。

【旧四番】

渤海湾（ぼっかいわん）に浪立ちて　　四億の民は楫（かい）を絶え

この歌詞が作られた年の７年前の 1911 年（明治 44）には辛亥革命が起き、中国同盟会の代表孫文が臨時大総統に就任、南京において中華民国建国の宣言を行った。一方、清朝政府は渤海湾およびその周辺を支配していた北洋軍閥の総帥袁世凱を内閣総理大臣に任命した。北京の清朝政府と、南京の中華民国臨時政府との間で、どちらが主導権を握るかということに関し南北和議が行われ、その結果清朝は宣統帝溥儀を退位させ、孫文は臨時大総統を辞任し、袁世凱が中華民国臨

時大総統に選出された。1912 年清朝は滅亡し、中国大陸に共和制が行われることになった。1914 年（大正 3 年）第１次大戦が勃発した。1915 年（大正４年）、袁世凱は自身を皇帝とする帝政を実現しようとして、皇帝即位の宣言を行い、中華帝国の樹立を宣言した。しかし直ちに反帝運動がおこり、革命軍が各地で反乱を起こした。翌年 1916 年（大正５年）３月、袁は帝政を取消し、皇帝の座から引きずり降ろされた。ほどなく失意の中で病没した。この結果各地で軍閥政権が起こったが、どの軍閥も中国全土を統一できる力はもっておらず、不安定な情勢となっていた。これは、赤山健児の歌成立の２年前の出来事である。
「渤海湾に浪立ちて」は北京に近い渤海湾とその周辺を支配していた北洋軍閥の袁世凱の政変が起ったことを表す。「楫」は櫂あるいは舵の両方を意味する言葉である。「四億の民は楫を絶え」は中国四億の民を統一する指導者が定まらず、指導者不在の状態となっているという意味である。

興安嶺（こうあんれい）に雲湧きて　　東亜の危機は迫り来ぬ

日露戦争の頃から、東三省（満州国の位置）に馬賊の頭目として張作霖がいた。張作霖とその配下の馬賊は清朝に帰順し、張作霖は 2000 人規模の軍隊の部隊長となった。張作霖の下にはさらに多くの馬賊が集まり、隠然たる勢力を形成した。1916 年、袁世凱が死去し、清朝が滅ぶと、張作霖は軍閥として自立し、東三省全域を勢力圏とし、満州の覇者として君臨した。満州王と呼ばれていた。
「興安嶺」は、大小２筋の興安嶺山脈のことであり、満州を象徴的に表している。「興安嶺に雲湧きて」は張作霖の軍閥が満州に君臨したこと。「東亜の危機は迫り来ぬ」は、後年の、張作霖と各地の軍閥との内戦の予感を示している。結局、健児の歌の 10 年後に、北京政府は、孫文の後を継いだ蒋介石による北伐軍に敗北し、張作霖は北京から奉天への列車による移動中に、日本の関東軍に爆殺された。その３年後に満州事変が起こる。

重き使命を背に負ひて　　起てや赤山健男児

赤山健児は、本校を卒業した暁には、東アジアの平和という重い使命を負って、国のために立ち上がり、東アジアの安定に尽力せよ、という意味である。

赤山健児の歌が作られた年（大正７年）の終わりに、ドイツ革命が起こり、ドイ

ツ皇帝は退位し、ドイツは降伏した。続けてオーストリアも皇帝が退位し、降伏した。その結果、第１次大戦は休戦となった。第１次大戦が終わり、時代は、国際協調の時代となり、旧四番の歌詞は時代にそぐわないものとされた。このため、西村校長の次に校長に就任した田中一元校長によって、大正 10 年（大戦終結の３年後）に、旧四番に代わる新四番が作詞された。これが今日まで四番として歌われている歌詞である。

【新四番】

稜威(みいつ)輝く日の本の　　国の礎(いしずえ)さし固め

「稜威」は天皇の威光の意味。天皇の威光の輝く日本は、まず、産業などを盛んにし、国の基礎を固めることを行わねばならない。

東洋平和を保つべき　　使命を負へる我等なり

我らは、アジアの平和を保つという使命を負っている。

責務は重く身は軽し　　起てや赤山健男児

責務は重い。赤山健児は、一身をなげうつ覚悟をもって、国の基礎を固めることと、アジアの平和を保つために立ち上がれ。

赤山健児の歌は、書き換えられた新四番も含めて、明治大正期の戦争や大陸の内戦の影響を多く受けている。当時の日本は軍国主義・国粋主義の時代だった。平和な平成時代の日本で、約 100 年前の、赤山健児の歌成立の時代の世界情勢を実感することは難しい。しかし、現在中東シリアで起こっている政府軍・反体制派・イスラム国の内戦や、国境を越えた外国の干渉などに似たことが、約 100 年前の東アジアで起こっていたのである。これらの歴史的事実は、この歌の作者にとっては、過去の歴史ではなく、現在進行中の事態であり、影響を受けるのは当然である。しかし我校はこの歌を長年にわたって歌い継いできた。歴史的背景を切り離せば、旧四番を除いて普遍妥当な内容であり、非常に良く出来た歌詞だといえる。したがって、今後も歌い継がれることが望まれる。

赤山健児の歌について　**参考文献**

１　松江北高等学校 100 年史（松江北高等学校）
２　山中幸盛（W）
３　安来市の戦国武将山中鹿介幸盛
４　日本の第一次世界大戦参戦
５　第一次世界大戦下の日本（W）
６　委任統治（W）
７　南洋群島の経済的展望
８　シベリア出兵（W）
９　青島の戦い（W）
10　空襲（W）
11　モーリス・ファルマン 1912 型水上機
12　水上機母艦（W）
13　日露戦争（W）
14　ポーツマス条約（W）
15　満州をめぐる日本と米国
16　ジョン・ヘイの門戸開放・機会均等
17　満蒙独立運動　波多野勝（PHP 新書）
18　満州国（W）
19　五族協和（W）
20　大陸浪人（W）
21　孫文（W）
22　袁世凱（W）
23　南北和議（W）
24　蒋介石（W）
25　張作霖（W）
26　張作霖爆殺事件（W）
27　満州事変（W）
28　１９２６年初頭の軍閥割拠の情勢
29　北伐の進軍経路

（備考）文献 2～16、18～29：Internet から入手した資料
W：上記のうちの Wikipedia 表示のあるもの